

嚥下機能回復に力

潟上市の介護老人

保健施設「ほのほの苑」で、食べることが困難な摂食・嚥下障害の入所者に対して医師や言語聴覚士らの栄養サポートチームが中心となってリハビリを行い、成果を上げている。内科医でもある小玉敏央施設長は「鼻などからチューブを通して栄養を補給する経管栄養では、長期間にわたるとミネラルや亜鉛の補給が難しいといわれる。また、おいしい物を味わうことは人生の喜びの一つであり、かむのみ込むといった動作は脳に刺激を与える効果もある。『食べる』ことの意義は大きい」と話している。

「もともと好き嫌いなく、何でも食べていた。今は、食事が一番の楽しみようだ。以前はたまに自宅に戻っても、私たちが目の前で食べるのは気の毒なので別々に食事していたが、家族で食卓を囲めるようになった」

医師ら連携しリハビリ

潟上市の介護老人保健施設 食べる喜びを取り戻す



嚥下造影検査で障害の程度の評価を受ける入所者。造影剤を混ぜたゼリーなどをのみ込む様子を撮影する＝潟上市の南秋田整形外科

べられるまでになった。別の入所者の家族は「経管栄養のときに比べ、きざみ食を食べれるようになった今の方が元気」と語る。

ある入所者の家族が、うれしそうに話す。この入所者は二年前に同苑に入った。それまでは、脳梗塞で県内の医療機関に入院、経管栄養に頼っていた。それが摂食・嚥下機能の回復を図るリハビリによって、おかゆや細かく刻んだ肉、野菜が食

べられるまでになった。別の入所者の家族は「経管栄養のときに比べ、きざみ食を食べれるようになった今の方が元気」と語る。

ある入所者の家族が、うれしそうに話す。この入所者は二年前に同苑に入った。それまでは、脳梗塞で県内の医療機関に入院、経管栄養に頼っていた。それが摂食・嚥下機能の回復を図るリハビリによって、おかゆや細かく刻んだ肉、野菜が食

られ、十分なリハビリが行われぬようになってきている」と指摘する。

同苑では、意識障害がなく経管栄養の人を対象に、まず少量の水を飲ませて「むせ」を調べるテスト、ゼリーや刻んだ寒天に造影剤を混ぜた食品をのみ込む様子を撮影する嚥下造影検査などを行い、障害の有無や程度を確認。医師や言語聴覚士、介護職員らが連携しながら、ゼリーなど食べられそうなものから摂取訓練に取り組む。

口を開けたり閉じたり、舌を動かしたりするリハビリも実施。何もみ込めない場合は冷やした綿棒などの奥を刺激、嚥下反射を誘発するマッサージから始める。嚥下造影検査は、同じ医療法人の医療機関で行う。

今年二月には、各職種の代表者による栄養サポートチームが発足。毎月一回、ミーティングを開いて一人一人の経過報告や今後のリハビリ計画などを確認、よりスムーズな連携を図っている。言語聴覚士の奥山香里さんによると、平成十五年一月から現在まで、摂食・嚥下障害により経管栄養を受けていた入所者四十三人のうち、リハビリなどを経て十五人がゼリーを摂取できるまで回復。そのうちの七人は、おかゆや刻んだ肉、野菜、うどんなどが食べられるようになった。看護科の石川秀子科長は「経管栄養のときは、ほとんどベッドから離れなかったが、食べられるようになってからは車いすに乗りたりしている。食事の際、ほかの入所者とコミュニケーションを取ることが刺激になっているようだ」と話している。